

## 学会参加報告Indoor Air 2018

水越厚史<sup>1)</sup>, 篠原直秀<sup>2)</sup><sup>1)</sup>近畿大学医学部環境医学・行動科学教室 〒589-8511 大阪府大阪狭山市大野東377-2<sup>2)</sup>国立研究開発法人 産業技術総合研究所 〒305-8569 茨城県つくば市小野川16-1

## Report on Indoor Air 2018

Atsushi MIZUKOSHI<sup>1)</sup> and Naohide SHINOHARA<sup>2)</sup><sup>1)</sup>Department of Environmental Medicine and Behavioral Science, Kindai University, 377-2 Ohnohigashi, Osakasayama, Osaka 589-8511, Japan<sup>2)</sup>National Institute Advanced Industrial Science and Technology, 16-1 Onogawa, Tsukuba, Ibaraki 305-8569, Japan

International Society of Indoor Air Quality and Climate (ISIAQ)主催のIndoor Air 2018に参加しました。本学会は2018年7月22日から27日の6日間、米国フィラデルフィアのペンシルバニアコンベンションセンターで開催されました。Indoor Airは1978年のIndoor Climateから数えて15回目の開催となります。当学会の概況を把握するため、発表リストを集計すると、セッション数は109(うち口頭79, ポスター30)あり、発表は673件(うち口頭449件, ポスター224件)という規模でした。Fig.1はセッションのタイトルをシリーズ毎にまとめたものです。外側にセッションタイトルから抽出したキーワードを配置してあります。Fig.1をみると、室内濃度や発生源、化学反応、微生物、ダンプネス等の室内空気質の実態に関するものから、健康影響、疫学、快適性、生産性、知覚等、人体影響に関わるもの、建物のシミュレーション、CFD、換気、空気清浄、エネルギー、気候変動等、建築や対策に関わるものなど、様々な視点からの研究発表がバランスよくなされ、室内空気質を多角的にとらえ、最適解を得るための議論が行われたことがうかがわれました。この他、スペシャルセッションが25あり、最近のテーマが取り上げられていました(Fig.1, センサーの利用、衣服の影響、電子たばこ、スマート換気等)。池田先生と青柳先生<sup>1)</sup>は、Indoor Air 2018の講演タイトルに含まれる対象物質を抽出して動向解析を行い、興味深い結果を報告しています。それによると、「物質」に該当するキーワードとしては、微粒子(particles/particulate)が最も多く、具体的な化学物質名としては、ホルムアルデヒド、

VOCs等が多かったとされています<sup>1)</sup>。ホルムアルデヒドは、処理技術やセンサー測定技術、放散量測定についての報告が多くありました。

筆者らの興味を持った研究として、non-targetの一斉分析などの高額機器を用いた測定の報告が複数見られたことや、化学物質の曝露と睡眠との関連についての報告がありました。また、プレナリーで衣服の着用によりSVOCへの曝露が高くなるという報告等、SVOCの吸脱着に関する報告も少なくなかった印象です。化学物質過敏症に関する質問票Quick Environmental Exposure and Sensitivity Inventory(QEESI)を開発したMiller先生が参加されていて、お話しすることができたのは幸運でした。発表リストには、スペシャルセッション：化学物質不耐のイニシエーターとトリガーの特定があり、Toxicant-induced loss of tolerance(TILT)の概念やTILTのイニシエーターとなる曝露イベントの調査、QEESIをする必要があるかどうかを判断する3つの質問Brief Environmental Exposure and Sensitivity Inventory(BREESI)、トリガーの特定のためのIAQ評価、生体試料調査、QEESIを用いた調査の計画と初期の結果等がありました。Fig.2はポスター会場の風景です。活発な議論が行われていました。

会期中は、時々土砂降りの雨が降りましたが、それ以外は良く晴れて気持ちの良い天気でした。会場は、フィラデルフィアの中心部にあり、歴史的な「自由の鐘」のあるリバティーベルセンターも近かったです。ロッキーが階段を駆け上がったフィラデルフィア美術館にも歩いていくことができました。Fig.3

はその近くにあるロダン美術館の考える人と、フィラデルフィア美術館の階段下にあるロッキー像、そして、階段の上からの眺めです。これを見て、あまり考えすぎない方がよいのかもしれないと思いました。

引用文献

1) 池田四郎, 青柳玲児: 室内環境—第1講 室内環境問題の概要— 室内環境研究の変遷と今後の課題—, 大気環境学会誌, 54, A80-A84 (2019)

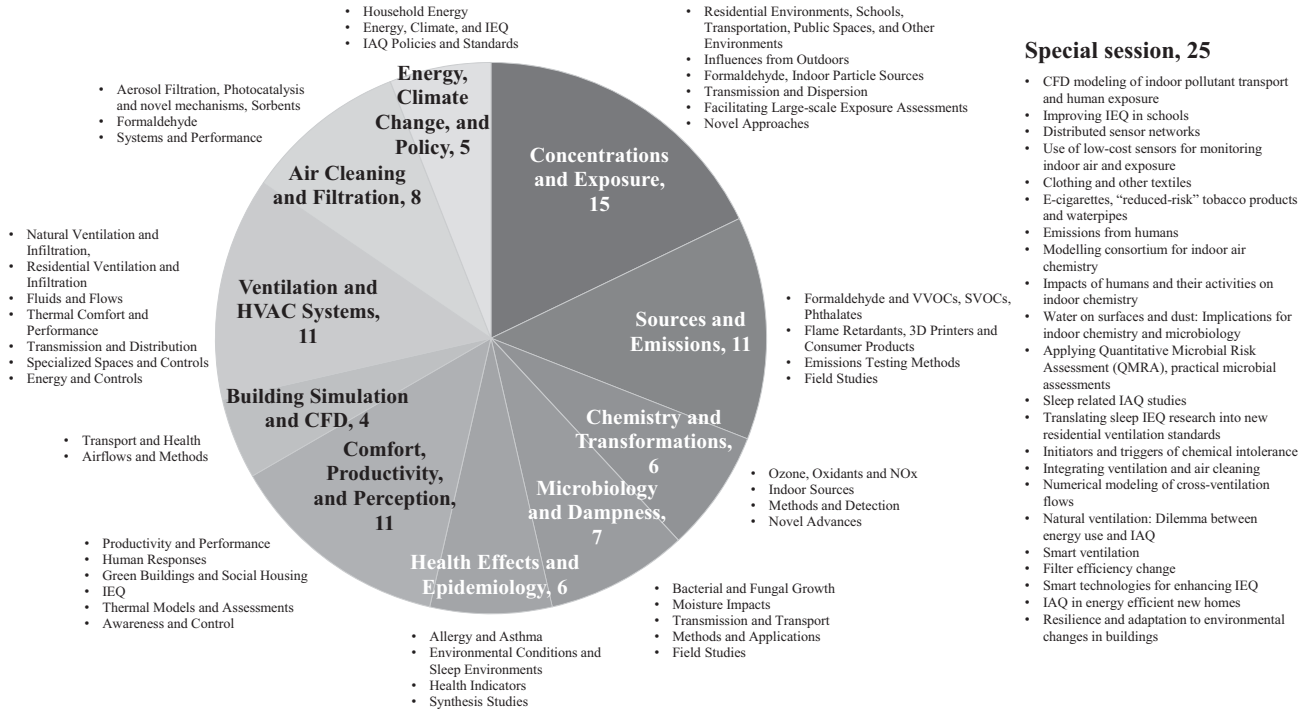


Fig. 1 Indoor Air 2018のセッションタイトルとキーワード(数字はセッション数)



Fig. 2 ポスターセッションの様子



Fig. 3 ロダン美術館の考える人(左), フィラデルフィア美術館前のロッキー像(真ん中)と眺め(右)